Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-02-28

トラウマに対する自己非難的帰属研究の国外文献レビュー

勝間田，冬華
吉田，圭吾

(Citation)
神戸大学発達・臨床心理学研究,22:7-15

(Issue Date)
2023-02-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100482197

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482197

神戸大学　発達・臨床心理学研究
第22巻　2023

トラウマに対する自己非難的帰属研究の国外文献レビュー

A review of Self-Blame Attribution for trauma in International Literature

勝間田 冬華*　　吉田 圭吾**
Fuyuka KATSUMATA *　Keigo YOSHIDA **

要約：本稿の目的は1979年から2022年までの，トラウマに対する自己非難的帰属（Self-blame attribution）に関する国外の研究動向をレビューし，今後の展望を論じることである。Janoff-Bulman（1979）が行動の自己非難（Behavioral Self-blame）と特性の自己非難（Characterological Self-blame）という2つの自己非難的帰属の枠組みを提起してから40年ほど経つが，本邦において，自己非難的帰属を主題とした研究はほとんどなされていない。一方で，自己非難的帰属がトラウマ経験による心理的影響に大きく関わる可能性があることから，トラウマケアを考えるうえでは自己非難的帰属の理解が重要である。そこで，本稿では国外における自己非難的帰属の先行研究を概括し，動向を整理した。収集された47編の文献を検討した結果，従来の自己非難的帰属研究の特徴として，1）性被害に対する原因帰属に主な関心が置かれてきたこと，2）量的な検討を中心に発展してきたこと，3）行動の自己非難の適応的機能に関する知見が一致していないこと，4）自己非難的帰属が及ぼす影響に主な関心が置かれてきており，発生メカニズムについては未だ明らかになっていないことが示唆された。以上の結果から，今後は多様なストレス領域を対象にした検討，さらには発生メカニズムや自己非難的帰属への有効な介入方法の解明が必要であると考えられる。

キーワード：自己非難的帰属，行動の自己非難，特性の自己非難

はじめに

トラウマティックな体験は人々に多くの影響を与える。特に，トラウマを体験した人の多くが，実際には自分に責任がないのに，それを回避できなかった自分を責め，罪悪感や屈辱感を感じて苦しむ（飛鳥井，2010）。このような，トラウマ後に生じる自己非難の感覚は原因帰属（Causal attribution）の枠組みによって説明することができる。すなわち，トラウマ体験のような制御不能な出来事は，「なぜ私にこんなことが起こったのか？」という問いに答えようとする試みである原因帰属を刺激するのである（e.g. Janoff-Bulman, 1992）。

原因帰属の概念は，社会心理学の分野で Heider が提起した後，Weiner によって達成領域の分野を中心に展開されてきた。Weiner et al.（1971）は，達成領域における原因帰属要因として，努力，能力，課題の困難度，運の4つを挙げた。続いて，原因の次元として，原因の位置，安定性，統制可能性の 3 つの次元を想定している（Weiner，1979）。原因の位置は，原因が個人の内にあるか，外にあるかを問題とする。安定性の次元は，帰属因の時間的安定性・変動性に着目した次元であり，時間的にみて相対的に変動しやすい不安定な要因と，変動しがたい安定した要因に分類される。例えば，能力は時間がたっても変わるものではないので安定と考え，努力や運などは不安定と考える（小川，2011）。最後に，統制可能性とは，人の意志的統制を働かせることが可能か否かを意味するものである（速水，1990）。Weiner の理論では，成功・失敗に対して行われた原因帰属は，その帰属因の各原因次元上での特徴に応じて，期待や感情に異なった影響を与え，この期待と感情を媒介として後続の行動が決定されると考える（奈須，1988）。

以上のような Weiner の帰属理論をもとに，トラウマ体験後に生じる自己非難的な原因帰属の枠組みを提案したのが Janoff-Bulman（1979）である。Janoff-Bulman（1979）は，性的暴行の被害者を援助するカウンセラーへの調査をもとに，トラウマに対する自己非難的帰属が，行動の自己非難（Behavioral self-blame：以下，BSB）と特性の自己非難（Characterological self-blame：以下，CSB）の2つに区別されることを提案し，それぞれ次のように説明している。BSB は統制感に関連し，修正可能な原因（行動）に対する帰属を伴うものである。そして，将来における否定的結果の回避可能性に関する信念と関連する。一方で，CSB は自尊心に関連し，比較的修正不可能な原因（特性）に対する帰属を伴い，過去の否定的な結果がその個人に値するものであったという信念と関連する。例えば，自身の性被害に対して，「知らない人を家の中に入れるべきではなかった」「夜遅くまで外出するべきではなかった」（Janoff-

＊　神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士前期課程
＊＊　神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

2022 年 11月 30日 受稿
2022 年 12月 20日 受理

Bulman, 1979)，いじめ被害に対して，「もっと気をつけるべきだった」「そこにいるべきではなかった」（Graham & Juvonen, 1998）などと，被害の原因を自身の行動に帰属するのが BSB である。一方で，原因を自身の特性に帰属する CSB の例として，「人を信じすぎる」「トラブルを引き起こすような人間である」（Janoff-Bulman, 1979)，「もしも私がもっとかっこよければ，いじめられないだろう」「反撃しないから彼らはいじめる」（Graham & Juvonen, 1998）などが挙げられる。これら 2 つの自己非難的帰属を Weiner（1979）の 3 次元モデルに照らし合わせると，BSB と CSB はどちらも内的帰属であるが，両者は安定性と統制可能性の次元で異なる。すなわち，BSB は内的，不安定，統制可能なものであるのに対し，CSB は内的，安定，統制不可能なものである。また，先述のように，BSB は将来，CSB は過去に関心が向けられることから，両者は時間的展望の観点からも区別することができる（Janoff-Bulman，1979）。

以上のような自己非難的帰属は，トラウマ体験とその後の心理的不適応を媒介することが明らかにされている（e.g. Graham, Bellmore, & Mize, 2006）。すなわち，自己非難のような否定的な認知はトラウマを経験したサバイバーにとって有害なものとなりうるのである。このことから，自己非難的帰属への介入が有効であると考えられている（e.g. Mokma, Eshelman, & Messman-Moore, 2016；Sigurvinsdottir, Ullman, & Canetto, 2019）。なお，Janoff-Bulman（1979）は，BSB は適応的，CSB は不適応な機能を持つと主張した。Weiner の達成領域における原因帰属理論では，失敗を能力不足（内的，安定的，統制不可能な要因）ではなく，努力不足（内的，不安定，統制可能な要因）に帰属する方が望ましいと考えられており，トラウマに対する帰属においても CSB（内的，安定，統制不可能）に比べて，BSB（内的，不安定，統制可能）がより適応的であると考えられているのである。

このように，トラウマ後の心理的影響に自己非難的帰属が関連し，また，原因帰属のタイプによって影響が異なる可能性があるのであれば，トラウマケアを考えるうえで自己非難的帰属は極めて重要な概念であるといえる。しかし，Janoff-Bulman（1979）が 2 つの自己非難的帰属の枠組みを提唱してから，40 年ほど経つが，本邦において自己非難的帰属およびその後の影響を主題とした研究は未だなされていないのが現状である。一方，国外では Janoff-Bulman（1979）の仮説にもとづいた研究が蓄積されつつある。そこで，本稿では，Janoff-Bulman（1979）が提唱した 2 タイプの自己非難的帰属に関する国外の研究を概括し，先行研究の動向と今後の展望を論じる。その主な意図は，トラウマに対する自己非難的帰属およびその後への影響に関する研究を普及し，トラウマケアに有効なさらなる研究知見の蓄積を目指すことにある。また，Yang, Mcdonald, & Seo（2022）が自己非難的帰属や BSB と CSB の適応的機能に文化による差がある可能性を示唆していることからも，本邦における自己非難的帰属の理解および研究の蓄積が必要であると考えられる。

方法

国外の論文の検索には，Google Scholar および PsycINFO を使用し，検索ワードは“self-blame attribution” “characterological self-blame”“behavioral self-blame” とした。対象期間は Janoff-Bulman（1979）が自己非難的帰属の概念を提唱した以降の，1979 年から 2022 年に指定して検索を行った。検索にかかった論文のうち，全文にアクセス可能であり，以下の条件に合致した研究を検討対象とした。(1) BSB と CSB を区別して検討している，(2) 否定的な出来事に対する帰属を検討している，(3) 学術誌に掲載された実証的な研究論文である。また，上記に該当する引用文献も含めた。続いて，国内における研究動向を把握するために，NII 学術情報ナビゲータ（CiNii），科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE），および Google Scholar を使用して論文の検索を行った。なお，検索ワードに “self-blame attribution” “characterological self-blame” “behavioral self-blame”および「自己非難的帰属」「自己非難」「自責」「特性の自己非難」「人格の自己非難」「行動の自己非難」を使用し，期間を 1979 年から 2022 年に指定した。

結果

文献収集の結果，47 編の国外の研究論文が収集された（Table 1）（2022 年 9 月 25 日現在）。なお，国内において，条件に該当する研究論文はなかった（2022 年 9 月 25 日現在）。

(1) 自己非難的帰属の研究領域

収集された 47 編の研究論文の体験領域の内訳は，性被害が 24 編，身体的疾患が 10 編，いじめが 10 編，周産期医療，全般的な虐待，DV がそれぞれ 1 編であった。

(2) 研究の方法

自己非難的帰属の測定方法は，尺度による質問紙調査が 36 編，面接調査が 5 編，質問紙調査と口頭での回答を組み合わせたものが 2 編，尺度および自由記述式を用いた質問紙調査が 2 編，尺度による質問紙調査と面接調査を組み合わせたものが 1 編，会話からの抽出によるものが 1 編であった。最も多く用いられている測定方法は尺度による質問紙調査であり，特に，各領域のストレス体験に応じた自己非難的帰属の尺度開発が試みられていた。

まず，性被害においては，Rape Attribution Questionnaire（RAQ；Frazier, 2000, 2002, 2003）が多く用いられていた（Frazier, 2000, 2003；Hamrick & Owens, 2018；Harris, Ullman, Shepp, & O'Callaghan, 2021；Kline, Berke, Rodes, Steenkamp, & Litz, 2018；Koss & Figuredo, 2004a, 2004b；Koss, Figuredo, & Prince, 2002；Sigurvinsdottir, Ullman, & Canetto, 2019；Ullman, 2014；Ullman, Filipas, Townsend, & Starzynski, 2007；Ullman, Peter-Hagene, & Relyea, 2014；Ullman, Townsend, Filipas, & Starzynski, 2007）。最も多く用いられていた RAQ（Frazier, 2003）は，BSB，CSB，加害者への帰属，社会への帰属，偶然の要因への帰属といった異なる 5 つの帰属を測定するものである。回答は 5 件法で求められ，再検査法によって十分な内的整合性が確認されている。性被害領域では，RAQ のほかにも，Abuse Attribution Inventory（AAI；Feiring, Simon, & Cleland, 2009）（Alix et al., 2019）や，Measuring of Self-Blaming Attributions（MSA；Hassija & Gray, 2013）などが用いられていた。

続いて，身体的疾患における量的尺度として，心血管疾患者を対象とした Cardic Self-Blame Attributions（CSBA；Harry et al, 2018）が開発されていた。CSBA は，確認的因子分析によって BSB，CSB の 2 因子からなることが示され，十分な信頼性および妥当性が確されている。また CSBA をもとに，がん患者に適用可能な Self-Blame

Table 1　国外における自己非難的帰属研究の概要

研究	学術誌名	調査対象者	体験の種類	研究デザイン	原因帰属に関する尺度	測定変数	自己非難的帰属に関連する主な結果
Alix, Cossette, Cyr, Frappier, Caron, & Hebert. (2019)	Journal of Child Sexual Abuse	青年期の少女100名	性被害	量／縦断	Abuse Attribution Inventory (AAI; Feiring, Simon, & Cleland, 2009)	性的被害の内容, 虐待における羞恥心 コーピング方略, PTSD症状, 抑うつ, 自殺念慮	T1での自己非難的帰属がT2の抑うつ症状を予測した
Anderson (1999)	Journal of Language and Social Psychology	120名の男女	性被害	量／横断	調査対象者がある性的被害場面について 議論した会話の内容から抽出		CSBよりもBSBの割合が大きかった 女性の性被害者は男性の性被害者よりも男性参加者からの非難を受ける
Artime & Peterson (2015)	Psychological Trauma: Theory, Research, and Policy	性被害者189名	性被害	量／横断	Sexual Victimization Attribution Measure (SVAM; Breitenbecher, 2006)	性的被害の内容, 被害体験時の性行為に対する欲求, 被害体験時の性行為への同意の程度, 否定的信念	性被害場面において，性行為に内心で同意していたという感覚が，性被害者のBSB及びCSBを高める要因となる 性交渉への欲求の強さはCSBの保護因子となる
Batanova, Espelage, & Rao (2014)	Joounal of Social Rsychology	5-8年生の653名	いじめ	量／横断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）に2項目加えたもの	感情（抑うつ・怒り）, コーピングスタイル いじめ被害, いじめへの介入の意思	被害経験の少ない男子において，CSBはいじめへの介入意思と負の相関を示した
Christensen, Moran, Ehlers, Raichle, Kamell, & Funk (1999)	Journal of Behavioral Medicine	がん患者55名	疾患	量／横断	独自作成	統制感, 抑うつ, 喫煙・飲酒行動	がんの原因となったと考えられる特定の行動へのBSBと将来におけるがんの症状に対する統制感の相互作用によって，治療後の喫煙行動が予測された
Doble, Lau, Malhotra, Ozdemir, Teo, & Finkelstein (2020)	Journal of Psychosomatic Reseach	がん患者968名	疾患	量／横断	独自作成 尺度に2以上を答えた者に自由記述式質問紙	延命治療の希望, 過去24時間での鎮痛剤の使用	CSBをする人はそうでない人に比べて，鎮静剤の使用を好み，BSBの人はそうでない人に比べて延命治療を選択する
Eways, Bennett, Hamilton, Harry, Marszalek, Mary-Joy, & Wilson (2020)	ONCOLOGY NURSING FORUM	がん患者113名	疾患	量／縦断	Self-Blame Attributions for Cancer Scale（SBAC） （Cardic Self-Blame Attributions（CSBA; Harry et al, 2018）をがんに適用可能に修正したもの）	睡眠障害, 統制の所在	がんに適応可能なBSBとCSBの2因子からなる新たな尺度が開発された
Feiring & Cleland (2007)	Child Abuse and Neglect	8歳から15歳の性被害者160名	性被害	量／縦断	インタビュー調査及びAttributions About Abuse Inventory（AAAI; Feiring, 2002）	性的被害の内容, 一般的な原因帰属傾向, PTSD症状, 抑うつ	BSBとCSBは経時的に変化する T1の自己非難が強さが，T3の抑うつ症状，侵入症状の深刻さと正の相関を示した
Frazier (1990)	Journal of Personality and Social Psychology	性被害者67名	性被害	量／横断	独自作成（Meyer & Taylor（1986）の15項目を含む）	抑うつ	BSBとCSBが性被害後の抑うつ症状の増大と関連した
Frazier (2000)	Journal of Personal and Interpersonal Loss	性被害者104名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2000）	抑うつ（BDI）, 不安, 敵意, PTSD症状	外的帰属は，自己非難的帰属よりも強く苦痛と関連する T1のBSBとCSBはともに，T1, T2, T3の回復指標と負の関連
Frazier (2003)	Journal of Personality and Social Psychology	性被害者171名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	統制感, 心理的苦痛（抑うつ, 不安, 敵意）	BSBは4時点すべての苦痛と正の相関を示し，BSBの減少が苦痛の減少と関連した T1のBSBがT1, T2, T4の心理的苦痛を予測した
Georgiou & Stavrainides (2008)	School Pschology International	6年生377名	いじめ	量／横断	Weiner（1985）をもとに独自作成	いじめ被害・加害（本人及び保護者, 教師の回答） 子どもの逸脱行動, 子どもの社会的に受容されている程度および気質, いじめ被害・加害経験（母親評定）	いじめ被害と加害を経験している群は，内的帰属（CSB, BSB）よりも外的帰属をする傾向にある
Glinder & Compas (1999)	Health Psychology	乳がん患者76名	疾患	量／横断・縦断	構造化面接	自己非難, 情緒的苦痛（不安, 抑うつ）, 医療変数（がんの診断と病期）	診断時のBSBが同時点の情緒的苦痛を予測した 診断から3か月後のCSBが同時点の情緒的苦痛を予測した 診断から6か月後のBSBが同時点の情緒的苦痛を予測した 診断時のCSBが6か月後，1年後の情緒的苦痛を予測した
Graham, Bellmore, & Mize (2006)	Journal of Abnormal Child Psychology	6年生1985名	いじめ	量／横断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）	他者評定による加害・被害者の抽出, 心理的適応（孤独感, 社会的不安, 抑うつ, 自尊心の低さ）, 学校風土, 学業成績	被害者は加害者や適応的な生徒に比べてCSBをする傾向がある 被害体験がCSBを介して，心理的不適応と正の関連を示した
Graham & Juvonen (1998)	Devolopmental Psychology	7年生418名	いじめ	量／横断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）	他児評定による加害・被害者の抽出・適応指標（孤独感, 社会的不安, 自己価値観）・自己評定による被害者意識	CSBはBSBよりも強く，孤独感や不安と正の相関を示し，自尊心と負の相関を示した CSBは孤独，不安と正の関連を示した
Guy, Lee, & Wolke (2017)	Aggressive Behavior	11-16歳の青年754名	いじめ	量／横断	Crain, Finch, & Foster (2005), Crick (1995)をもとに独自作成	自己申告及び他児評定によるいじめ体験（関係性攻撃・ネットいじめ・直接的攻撃） 感情認知・敵意帰属バイアス	被害者は被害者でない者に比べて，より敵意的帰属, CSBをする傾向がある
Hamrick & Owens (2018)	Journal of Clinical Psychology	成人後の性被害者207名	性被害	量／横断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2002）	トラウマ既往歴, PTSD症状, 抑うつ, 撤退型コーピング, セルフコンパッション	セルフコンパッションはBSB及びCSBと負の相関を示した セルフコンパッションはBSB・CSB及び撤退型コーピングを介してPTSD症状と関連を示した セルフコンパッションは，CSBを介して抑うつ症状と関連を示した
Harris, Ullman, Shepp, & O'Callaghan(2021)	Journal of Sexual Aggression	複数犯による 性被害者350名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	ストレスフルなライフイベント, 性被害の内容, 回復に対する統制感, 自己開示に対する社会的反応, コーピング方略, 抑うつ, PTSD症状	CSBがPTSDおよび抑うつと正の関連を示した
Harry, Bennett, Marszalek, Eways, Clark, Smith, Waters, Bergland, Umhoefer, & Wilson (2018)	Health Psychology Open	心血管疾患者121名	疾患	量／横断	Cardic Self-Blame Attributions（CSBA; Harry et al, 2018）		CSBAの妥当性・信頼性が確認された BSBとCSBは強く関連しており，自己非難には2つの要素があることが示された
Hassija & Gray (2013)	International Journal of Cognitive Therapy	性被害者89名	性被害	量／横断	Measuring of Self-Blameing Attributions（MSA; Hassija, 2013）	トラウマ既往歴, PTSD症状, 抑うつ, 不安, 性被害に関する将来の回避可能性	CSBは心理的不適応状態（抑うつ・PTSD）に関連し，BSBは不安症状の低減と関連を示した 将来の回避可能性が高い場合，BSBがPTSD症状の軽減を予測する
Hill & Zautra (1989)	Journal of Social and Clinical Psycology	性被害者36名	性被害	量／横断	独自作成	心理的苦痛	BSBとCSBの頻度は正の相関 CSBが意欲低下を予測する
Janoff-Bilman (1979)	Journal of Personality and Social Psychology	研究1：大学生129名 研究2：性被害者を支援する48施設	性被害	量／横断	研究1：独自作成 研究2：独自作成	研究1: 抑うつ, 自尊心, 統制の所在	【研究1】 うつ病の人はそうでない人に比べてCSBの傾向が高い 【研究2】 性被害者はCSBよりBSBを行なう傾向にある BSBは過去形，CSBが現在形で報告された
Katz, May, Sorensen, & DelToska (2010)	Journal of Interpersonal Violence	女子大学生93名	性被害	量／縦断	Behaviral and Characterological Self-Blame Scale (BCSB; O'Neill & Kerig, 2000)	性被害の内容, 性的場面における拒絶の主張	性被害はBSB及びCSBを予測する T1のBSBとCSBがT2の再被害と正の相関を示した T1の性被害に対するBSB及びCSBは，性的行為に対する拒否の主張の低さを介して，T2の再被害を予測する

Kline, Berke, Rhodes, Steenkamp, & Litz (2018)	Journal of Interpersonal Violence	性被害者126名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	PTSD症状	T1のBSBの高さがT2のPTSD症状の深刻さを予測した T2,3のPTSD症状がT3,4のBSBを予測した
Koss & Figuredo (2004a)	Psychology of Women Quartely	性被害者83名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2000） 回答は一部口頭	経験に対する開放性，暴力の被害歴，心理的問題歴，不適応な信念，PTSD症状，精神病理，社会的不適応	心理的な問題歴はCSBの高め，さらに不適切な信念を介して，心理的苦痛と正の関連を示す CSBのみが不適切な信念と正の関連を示した
Koss & Figuredo (2004b)	Journal of Counsulting and Clinical Psychology	性被害者83名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2000） 回答は一部口頭	不適切な信念，PTSD症状，精神病理， 社会的適応	2年間でBSB，CSBは減少した CSBが不適切な信念，心理社会的苦痛と関連し，時間経過に伴うBSBの減少が回復を促進する
Koss, Figuredo, & Prince (2002)	Journal of Consulting and Clinical Psychology	性被害者267名	性被害	量／横断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2000）	経験に対する開放性，暴力の被害歴，心理的問題歴，性被害の内容，不適切な信念，被害の記憶，精神病理，PTSD症状，社会的適応，身体症状	心理的な問題歴はCSBの高め，心理的苦痛と正の関連を示す BSBは心理的苦痛と負の関連を示す
Malcarne, Compas, Epping-Jordan, & Howell（1995）	Journal of Behavioral Medicine	がん患者72名	疾患	量／縦断	構造化面接 （BSB；Timko & Janoff-Bulman, 1985/CSB；Major, 1989）	統制感，心理的苦痛	T1のBSBがT2のCSBに関連し，T1のCSBがT2でのBSBと関連 T1のCSBが単独，またはBSBとの相互作用によってT2の心理的苦痛に正の関連 T1の心理的苦痛がT2のCSBを予測する
Manne & Sandler (1984)	Journal of Behavioral Medicine	性器ヘルペス患者152名	疾患	量／横断	独自作成	他者からの反応，コーピング方略，疾患の管理方略，ストレス思考， 適応指標（自尊心，抑うつ，性的問題，ヘルペスに悩んだ程度）	CSBAがすべての適応指標と正の相関を示したが，BSBはいずれの適応指標とも相関関係を示さなかった CSBはBSBよりも抑うつ，性的問題において，強く関連していた
McGee, Wolfe, & Olson (2001)	Development and Psychopathlogy	青年160名	全般的な虐待	量／横断	臨床面接（The Attributional for Maltreatment Interview: AFMI; McGEE，1990）	虐待体験の評価，適応	男性よりも女性において，帰属と適応との関連が強かった 自己非難的帰属は虐待の深刻度が増すほど低く，虐待の深刻度が増すほど加害者に帰属する傾向が高まる
Meyer & Taylor (1986)	Journal of Personality and Social Psychology	性被害者58名	性被害	量／横断	独自作成及び自由記述	コーピング，性被害による影響（性的満足度，抑うつ，性被害に関連する恐怖や不安）	BSB及びCSBが抑うつ症状と正の相関を示した
Mokma, Eshelman, & Messman-Moore（2016）	Journal of Child Sexual Abuse	大学生929名	性被害	量／横断	Janoff-Bulman（1979）をもとに独自作成	成人期の性被害，全般的な自己非難，PTSD症状，アルコールの使用	BSBとCSBはPTSSおよび再被害と正の関連を示した
O'neill & Kerig (2000)	Journal of Interpersonal Violence	家庭内暴力被害を受けた女性160名	DV	量／横断	Behaviral and Characterological Self-Blame Scale (BCSB; O'Neill & Kerig, 2000)	虐待の内容と深刻度，心理的症状（身体化，対人感受性，強迫症状，抑うつ），統制感	BSB及びCSBが心理的症状と正の相関を示した BSB及びCSBがDV被害と心理的症状の関係を予測する
Pham, Lee, Pham, Phan, Tran, Dang, Teo, Malhotra, Finkelstein, & Ozdemir (2021)	BCM Palliative Care	がん患者200名	疾患	量／横断	独自作成	知覚されたスティグマ，抑うつ，主観的幸福感，社会的幸福感， メンタルヘルスサービスの利用度及び利用意向	CSBのみが抑うつと正の関連，主観的幸福感と負の関連 BSBは関連なし
Plaufcan, Wamboldt, & Holm (2012)	Journal of Psychosomatic Research	喫煙歴のある慢性閉塞性肺疾患患者398名	疾患	量／横断	BSB（Mlcarne(1995)から引用した2項目） CSB（Internal Health Locus of Control Scale（Marshall,1991）の下位尺度）	家族機能（関係性，家族への批判，家族からの非難），抑うつ，不安，健康におけるQOL	家族からの非難とCSBは正の相関 BSBは抑うつ症状と負の関連を，CSBは抑うつ症状と正の関連を示した
Schacter & Juvonen (2015)	Devolopmental Psychology	6年生5991名	いじめ	量／縦断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）	いじめの被害者意識，学校のいじめの発生状況	いじめ被害はBSBよりもCSBを予測する 被害の少ない学校において，いじめ被害はCSBの増加と関連し，被害の多い学校ではBSBと関連した
Schacter & Juvonen (2017)	Journal of Applied Developmental Psychology	6-7年生5374名	いじめ	量／縦断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）	いじめの被害者意識，抑うつ，友人の抑うつ，社会経済的地位，学校の民族的多様性	抑うつがCSBを介して，その後のいじめ被害を予測する
Schacter & Juvonen (2019)	Child Development	中学生5991名	いじめ	量／縦断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）	いじめ被害，友人のいじめ被害，学校の民族的多様性，抑うつ，身体症状（頭痛，食欲不振，睡眠障害，腹痛など）	被害が相対的に増加するほど，CSBの傾向が高まる 友人の被害体験を知ることが，被害者のCSBの低さと関連する
Shelley & Craig (2010)	Canadian Journal of School Psycholog	220名	いじめ	量／縦断	独自作成	いじめ被害・加害経験，いじめの深刻度	男女ともにCSBがいじめ被害を予測する 男子において，T1のCSBがT2の被害を予測する
Sigurvinsdottir, Ullman, & Canetto（2019）	Traumatology	性被害者473名	性被害	量／縦断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	性被害の内容，性被害の深刻度，ストレスフルなライフイベント，自殺念慮及び自殺企図，PTSD症状，抑うつ	T1のCSBがT2の抑うつを介して，自殺念慮に正の関連を示した T1のCSBがT2のPTSD症状を介して，自殺企図に正の関連を示した、
Tennen, Affleck, & Gershman (1986)	Journal of Personality and Social Psychlogy	新生児治療室で重度の周産期治療を受けた子どもの母親50名	周産期	量／横断	インタビュー調査	新生児の病態の深刻度，新生児の回復と将来 の結果に対する統制感，再発に対する統制感，気分の状態	BSBが再発及び回復に対するコントロール感，知覚された深刻さと正の相関を示した 知覚された深刻さが，BSBと再発に対するコントロール感を介してポジティブな気分を予測した
Timko & Janoff-Bulman (1985)	Health Psychology	乳がんの治療として乳房切除手術を受けた女性42名	疾患	量／横断	インタビュー調査	抑うつ，感情反応（怒り，恥，不安など），自尊心	将来におけるがんの回避可能性は，過去に回避可能性と強く関連し，BSBが過去の回避可能性を予測した CSBと偶然性への帰属は，心理的適応と間接的かつ負の関連を示した
Ullmam (2014)	Traumatology	18-71歳の女性1863名	性被害	量／横断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	性被害の内容，コーピング方略，社会の反応，PTSD症状，PTG	CSBの高さはPTSD症状の深刻さと，PTGの低さに関連した
Ullman, Filipas, Townsend, & Starzynski (2007)	Journal of Traumatic Stress	性被害者1084名	性被害	量／横断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	性被害の内容，トラウマティックなライフイベント，社会的支援，被害経験の開示の有無，開示に対する社会の反応，回復における統制感，コーピング方略，PTSD症状	CSBがPTSDの重症度と関連を示した
Ullman, Peter-Hagene, & Relyea (2014)	Journal of Child Sexual Abuse	18-71歳の女性1863名	性被害	量／横断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003）	性被害の内容，トラウマティックなライフイベント不適切なコーピング，感情制御，PTSD症状，抑うつ	トラウマの既往歴がCSBを予測する CSBはPTSDや抑うつを予測しなかった
Ullman, Townsend, Filipas, & Starzynski（2007）	Psychology of Women Quartely	性被害者1084名	性被害	量／横断	Rape Attribution Questuionnaire （RAQ; Frazier, 2003） Brief Coping Orientations to Problems Experienced Scale(COPE; Carver, Scheier, & Weintraub, 1989)	性被害の内容，ソーシャルサポート， 性的暴行に対する社会的反応，回避型コーピング，トラウマティックなライフイベント，PTSD症状	社会からの否定的な反応は自己非難，回避的コーピング，PTSD症状と関連した 性被害の深刻さは社会からの否定的な反応の強さ，自己非難の低さ，PTSD症状の深刻さと関連した
Yang, Mcdonald, & Seo (2022)	Journal of Youth and Adolescence	7-8年生の755名（韓国463名，米国292名）	いじめ	量／横断	Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen, 1998）をもとに独自作成	いじめ被害，抑うつ，社会不安，自己価値観	被害体験とCSBは正の相関を示した CSBはBSBよりも強く，自尊心と負の相関，社会的不安及び抑うつと正の相関を示した 韓国ではCSBよりBSB，アメリカではCSBとBSBは同程度 アメリカでは被害体験がCSBを介して不適応状態を予測したが，韓国ではCSBは被害体験と自己価値観の低下のみを媒介し，被害体験がBSBを介して抑うつ，不安を予測した

Attributions for Cancer Scale（SBAC；Eways et al. , 2020）も作成されていた。一方で．これらを除く身体的疾患領域における研究の多くでは，独自に構成された質問項目が使用されていた（e.g. Christensen et al., 1999；Doble et al., 2020；Manne & Sandler, 1984；Pham et al., 2021；Timko & Janoff-Bulman, 1985）。

いじめ被害で最も多く用いられているのは，Graham & Juvonen（1998）によって開発された Attributional Questionnaire の原版（Graham & Juvonen，1998；Graham, Belmore, & Mize, 2006；Schacter & Juvonen, 2015, 2017, 2019），または Attributional Questionnaire（Graham & Juvonen,1998）に一部修正を加えたもの（Batanova, Espelage, & Rao, 2014；Yang et al., 2022）であった。Graham & Juvonen（1998）の Attributional Questionnaire は，2 つの仮想のいじめ被害場面，すなわち調査協力者自身がいじめ被害者であると仮定した場面を提示し，それに対する原因帰属について 32 項目の質問に 5 件法で回答するものである。因子分析の結果，CSB，敵意，不安，他者からの脅威，BSB，受動性の 6 因子が抽出されているが，多くの研究は，BSB と CSB の得点のみを分析に用いていた（e.g. Graham & Juvonen, 1998）。なお，Attributional Questionnaire は，BSB および CSB の各因子において十分な内的整合性が確認されている。また，Graham & Juvonen（1998）の Attributional Questionnaire を使用した上記の研究以外においても，本稿でレビューしたいじめに関するすべての研究で仮想場面が用いられており（Georgiou & Stavrainides, 2008；Guy, Lee, & Wolke, 2016；Shelley & Craig, 2010），実際の被害体験に関する帰属を測定した研究は確認されなかった。

DV 被害体験における帰属の測定には，O'neil & Kerig（2000）による Behavioral and Characterological Self-blame Scale（BCSB）が作成されていた。BCSB は BSB と CSB の 2 因子各 6 項目からなり，十分な信頼性が確認されている。

研究デザインに注目すると，すべての研究が量的な研究であった。収集された文献のうち，30 編は横断研究デザイン（性被害 14 編，身体的疾患 7 編，いじめ 6 編，周産期医療 1 編，全般的な虐待 1 編，DV1 編），縦断研究デザインは 16 編（性被害 10 編，いじめ 4 編，身体的疾患 2 編）であった。また，横断研究デザインと縦断研究デザインの両方を用いた研究が 1 編（性被害 1 編）であった。以上のように，多くは横断研究デザインであったが，性被害者を対象に 2 年間の追跡調査を行った Koss & Figuredo（2004b）や 3 か月後まで追跡した Kline et al（2018），乳がん患者を対象に診断時から 1 年後までを追跡した Glinder & Compas（1999）の報告のように，縦断研究デザインにより，自己非難的帰属がトラウマ後の心理状態に及ぼす影響について明らかにしているものも確認された。

(3) BSB と CSB の適応的・不適応的機能

先述のように，Janoff-Bulman（1979）は，BSB は適応的，CSB は不適応な機能を持つことを主張した。その後，BSB が同時点での苦痛と関連することは容易に考慮でき，適応的機能は時間的経過を経た後で生じるとしている（Janoff-Bulman，1992）。本稿でレビューした研究論文においても，Janoff-Bulman（1979, 1992）の仮説を検討することを目的とした実証研究が多く確認された。

まず，CSB の影響について，性被害を対象とした研究では，CSB が心理的不適応と正の関連を示すことが明らかにされている（Hill & Zautra, 1989；Harris et al., 2018；Ullman et al., 2007）。また，縦断調査によって CSB が抑うつや PTSD の侵入症状を予測すること（Alix, et al., 2019；Feiring & Cleland, 2007；Hassija & Bennet, 2013），さらに，CSB が抑うつや PTSD 症状を介して，希死念慮や自殺企図（Sigurvinsdottir et al., 2019）と正の関連を示すことが示唆されていた。

いじめを対象とした研究において，Graham & Juvonen（1998）によると，CSB が BSB よりも強く，孤独感や不安，抑うつ症状と正の相関を，自尊心と負の相関を示す。また，被害体験に対する CSB が，その後の心理的不適応（Graham & Juvonen, 1998；Graham et al., 2006；Yang et al., 2022）やいじめ被害体験（Schacter & Juvonen, 2017；Shelly & Craig, 2010）を予測することも報告されていた。

身体疾患領域では，CSB が心理的不適応や情緒的苦痛を予測することが明らかにされていた（Glinder & Compas, 1999；Timko & Janoff-Bulman，1985）。また，CSB のみが心理的不適応と正の関連を示す（Pham et al., 2021；Plaufcan, Wamboldt, & Holm, 2012）ことや，CSB は BSB よりも強く心理的不適応と正の関連を示す（Manne & Sandler, 1984）ことが示されていた。さらに，Doble et al（2020）によれば，2 タイプの自己非難的帰属が，それぞれ異なる治療方法の選択に関連する可能性がある。

続いて，BSB の適応的な機能について，Koss et al.（2002）や Plaufcan et al.（2012）は，BSB が心理的不適応と負の関連を示すことを明らかにしている。また，将来におけるトラウマ体験の回避可能性が高い場合において，BSB は PTSD 症状の軽減を予測する（Hassija & Gray, 2013）との知見も存在した。加えて，Koss & Figuredo（2004b）によれば，時間経過に伴う BSB の減少が回復を促進する可能性がある。

その一方で，BSB が心理的不適応（Frazier, 1990, 2003；Kline et al., 2018；Meyer & Taylor, 1986；Mokma et al, 2016；O'neill & Kerig, 2000）や再被害（Katz, May, Sorensen, & Deltoska, 2010）と正の関連，外傷後の回復指標と負の関連（Frazier，2000）を示すという知見も存在する。また，CSB と同様に BSB が心理的不適応を正の相関を示すものの，その関連は CSB よりは小さいこと（Graham & Juvonen，1998；Manne & Sandler，1984；Yang et al., 2022），BSB と CSB の相互作用によって，心理的苦痛が予測されること（Malcarne, Compas, Epping-Jordan, & Howell, 1995）を明らかにした研究も確認された。他にも，Timko & Janoff-Bulman（1985）は，将来におけるがんの回避可能性が，BSB によって予測される過去の回避可能性と強く関連することを明らかにし，Janoff-Bulman（1979）の主張と同様，BSB には適応的な機能がある可能性を示した。さらに，Glinder & Compas（1999）は，縦断調査の結果から，CSB は時間とともに悪化する苦痛と関連し，BSB は同時点の苦痛のみを予測すると結論づけており，Janoff-Bulman（1992）を支持する結果を報告している。

なお，以上のような BSB と CSB の影響については，Yang et al.（2022）によって文化差があることが示唆されている。また，BSB と CSB の影響を検討する際，多くの研究では，従属変数に PTSD 症状や抑うつなどの心理的不適応指標が用いられていたが，CSB と BSB およびトラウマ体験による肯定的な変化，すなわち心的外傷後成長（Posttraumatic Growth：以下，PTG）との関連を検討し，その結果，CSB が PTSD 症状と正の関連を示し，PTG と負の関連を示した研究も確認された（Ullman, 2014）。

（4）自己非難的帰属の生起に関わる要因

本稿でレビューした文献からは，自己非難的帰属に関連する要因を検討した研究も確認された。性被害において，性行為に内心で同意していたという感覚（Artime & Peterson，2015）や被害体験に対する社会からの否定的な反応（Ullman et al, 2007）が自己非難的帰属を高め，心理的な問題歴（Koss & Figuredo, 2004a；Koss et al, 2002）や抑うつ傾向の高さ（Janoff-Bulman，1979）が，CSB の高さと関連する可能性が示唆されていた。Ulman et al.（2014）によれば，トラウマ既往歴が CSB の高さを予測し，特に性被害は BSB および CSB を予測する（Katz et al., 2010）。一方で，被害の深刻さは自己非難的帰属の低さ（Ullman et al., 2007）と関連すること，BSB と CSB が時間経過とともに減少すること（Feiring, & Cleland, 2007）を示した知見もあった。また，Kline et al.（2018）によると，自己非難的帰属が PTSD 症状をはじめとする心理的不適応を予測する一方で，PTSD 症状もまたその後の BSB を予測する要因となりうる。

身体的疾患を対象とした研究では，家族からの非難が CSB と正の相関を示すこと（Plaufcan et al., 2012）が報告されている。

いじめ被害においては，どの立場でもいじめを経験していない適応的な生徒や加害者に比べて，被害者は CSB の得点が高いこと（Graham et al. 2006；Guy, Lee, & Wolke, 2006）や被害体験の深刻さと CSB との間に正の相関関係があること（Yang et al., 2022）が明らかにされている。一方で，Gergiou & Starvanides（2008）は，いじめの被害と加害の両方を経験している者は，内的帰属，すなわち BSB と CSB よりも外的帰属をする傾向にあると報告している。また，いじめの少ない学校におけるいじめ被害者は CSB 得点が高く，いじめの多い学校における被害者は BSB の得点が高いこと（Schacter & Graham，2015）や，被害が相対的に増加するほど CSB が高まり，友人の被害体験を知ることが被害者の自己非難的帰属の低さと関連すること（Schacter & Graham，2019）が示唆されていた。

全般的な虐待を対象とした研究においては，虐待の深刻度が増すほど自己非難的帰属の程度は低くなることが明らかにされている（McGee, Wolfe, & Olson, 2001）。

まとめと今後の展望

本稿では，国外における自己非難的帰属研究の動向を整理し，今後の展望を論じることを目的とした。本稿における文献レビューの結果によって明らかにされたこれまでの自己非難的帰属研究の特徴と，今後の展望を以下に述べる。

第 1 に，自己非難的帰属研究は，性被害を経験した者の原因帰属に主な関心が置かれてきたといえる。本稿でレビューした先行研究は，BSB と CSB の 2 タイプの自己非難的帰属を提唱した Janoff-Bulman（1979）をはじめ，性被害を対象とした研究が最も多かった。性被害以外のストレス体験領域として身体的疾患，いじめ，全般的な虐待や DV を対象とした研究論文もあったが，その数は性被害に比べて決して多くなく，これらの領域では研究知見が十分に蓄積されていないといえる。このことについて，McGee et al.（2001）は，従来，性的虐待において自己非難を含む認知的評価が虐待後の心理的影響をどのように媒介するかについての検討がなされてきたが，他の虐待についてはほとんど検討されていないと指摘している。今後，トラウマ体験に対する自己非難的帰属のメカニズム，および自己非難的帰属がトラウマ体験後の心理的反応に与える影響の全体像を明らかにするためには，性被害のみならず，多様なストレス領域における研究が必要であると考えられる。特に，いじめはトラウマとなり得る深刻な体験であり，被害者の心身や生活全般に否定的な影響を及ぼす（坂西，1995；香取，1999）。そして，これらの影響は青年期後期まで続く（荒木，2005）。このように被害者に重大な影響を及ぼすいじめは，本邦における大きな社会問題の一つである。いじめ被害者への有効な支援を考えるうえで，自己非難的原因帰属の検討は極めて重要であるといえよう。

第 2 に，自己非難的帰属研究は，量的な検討を中心に展開されてきていることである。本稿でレビューした文献の調査方法には，尺度による質問紙調査のほかに面接調査や自由記述式質問紙による調査が用いられていたが，レビューしたすべての研究が量的な検討によるものであったことは，自己非難的帰属研究の特徴の 1 つであるといえる。また，各領域において，様々な尺度が作成されており，このことによって，トラウマ体験の領域別の自己非難的帰属の測定が可能になっていた。一方で，使用している尺度が異なるため，研究間での結果の比較は困難である。以上のような現状を踏まえると，自己非難的帰属の測定方法は未だ一貫していないといえる。なお，いじめ領域において，使用されていた尺度はすべて仮想場面について回答を求めるものであった。仮想場面を用いる利点の一つは，被害経験のない者も研究の対象とすることが可能となる（Batanova, et al., 2014）ことであると考えられる。実際に，被害者と被害経験のない者（Batanova et al., 2014），被害者と加害者（e.g. Graham et al., 2006）を比較し，いじめを体験した立場による原因帰属傾向の違いを検討した研究も存在した。一方で，自己非難的帰属研究で仮想場面を用いることの問題として，外的妥当性の欠如が挙げられる（McGee et al.，2001）。今後は，実際のいじめ被害に対する評価を測定する尺度の開発が必要であると考えられる。さらに，身体的疾患に関する領域では独自の項目を用いた研究が多く，各疾患に適応可能な信頼性・妥当性の確認された尺度の開発は不十分であるといえよう。

第 3 に，BSB の適応的機能に関する知見が未だ一致していないということである。本稿でレビューした文献においては，BSB が適応的である可能性を示唆する研究や，CSB と同様に心理的不適応と関連することを示したもの，CSB に比べて心理的不適応との関連は小さいとするもの，BSB の適応的機能は時間的経過を経てから生じるとする Janoff-Bulman（1992）の主張を支持するものなど，得られた結果は一貫していなかった。したがって，BSB が

及ぼす影響に関するさらなる検討が必要であると考えられる。その際，Kingsbury & Espelage（2007）が，ある文脈で適応的であると判断された帰属が，別の文脈においても同じ価値を持つとは限らないと指摘しているように（Georgiou & Stavrinides, 2008），その影響はストレス体験の領域によって異なる可能性があることも考慮する必要があると考えられる。また，帰属スタイルと抑うつとの関連を検討した研究において，内的ー外的次元の妥当性を疑問視する見解が報告されている（e.g. 大芦・平井，1992；Peterson, Schwartz, & Seligman, 1981）ことを踏まえると，BSB と CSB の妥当性や BSB や CSB に代わるより適切な帰属について検討することも重要な課題の一つであろう（Graham et al., 2006）。

なお，多くの先行研究では，BSB と CSB との関連が予測される従属変数に，PTSD 症状や抑うつ，社会不安などのトラウマ体験および自己非難的帰属による負の影響を想定していた。一方で，トラウマ体験による肯定的な変化を検討した研究は，PTG を用いた Ullman（2014）のみであった。今後，BSB の適応的機能を検討するうえでは，ストレス体験の肯定的な側面である PTG との関連を検討することも重要であると考えられる。

第 4 に，自己非難的帰属研究は，その影響を中心に研究が積み重ねられてきているということである。そして，得られた結果をもとに，自己非難的帰属への介入がトラウマケアにおいて有効であると示唆する研究も存在した（e.g. Doble et al., 2022 ; Mokma, Eshelman, & Messman-Moore, 2016）。Doble et al.（2020）は，自己非難的帰属への介入が，トラウマ体験による症状の治療以上に，トラウマ体験後の経過に大きな影響を持つ可能性があると述べている。一方で，自己非難的帰属が，時間の経過とともに減少することは明らかにされているものの（Koss & Figueredo, 2004b），支援的な介入によって心理的不適応と関連する CSB を低減させることができるか，また自己非難的帰属の低減に有効な介入方法は未だ明らかにされていない（Ullman et al., 2014）。したがって，今後は，自己非難的帰属を低減させる有効な介入方法の解明，およびその効果の検証が重要であるといえる。

また，自己非難的帰属に影響を与える要因について検討した研究も存在したが，その数は決して多くなく，また一貫した知見は得られていなかった。そのため，なぜ自己非難が生じるのかを示した研究はないという Duncan & Cacciatore（2015）の指摘にあるように，自己非難的帰属の生起メカニズムについては未だ明らかになっていないといえる。本稿でレビューした文献の結果を踏まえると，自己非難的帰属の生起には，トラウマ体験の深刻さや被害者という立場，社会からの否定的な反応などが関連すると予想される。しかし，性被害といじめでは被害の深刻さと自己非難的帰属に異なる関連がみられたことから，生起メカニズムはストレス体験領域によって異なるのかもしれない。自己非難的帰属への有効な介入によって，トラウマ体験からの心理的苦痛や不適応を防ぐことを試みようとするのであれば，今後は，自己非難的帰属の生起メカニズムの解明が重要な課題の一つであるといえよう。

引用文献

Alix, S., Cossette, L., Cyr, M., Frappier, J., Caron, P., & Herbert, M. (2019). Self-blame, shame, avoidance, and suicidal ideation in sexually abused adolescent girls: a longitudinal study. *Journal of Child Sexual Abuse*, *29*, 437-447.

Anderson, I. (1999). Characterological and behavioral blame in conversations about female and male rape. *Journal of Language and Social Psychology*, *18*, 377-394.

荒木 剛（2005）．いじめ被害体験者の青年期後期におけるリズィリエンス（resilience）に寄与する要因について　パーソナリティ研究，*14*，54-68.

Artime, T. M., & Peterson, Z. D. (2015). Feelings of wantedness and consent during nonconsensual sex: implications for posttraumatic cognitions. *Psychological Trauma: Trauma, Research, Practice, and Policy*, *7*, 570-577.

飛鳥井 望（2010）．トラウマや PTSD で悩む人に「個々の傷」のケアと治療ガイド　保健同人社

坂西 友秀（1995）．いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差　社会心理学研究，11，105-115.

Batanova, M., Espelage, D. L., & Rao, M. A. (2014). Early adolescents' willingness to intervene: what roles do attributions, affect, coping, and self-reported victimization play? *Journal of School Psychology*, *52*, 279-293.

Christensen, A. J., Moran, P. J., Ehlers, S. L., Raichle, K., Karnell, L., & Funk, G. (1999). Smoking and drinking behavior in patients with head and neck cancer: effects of behavioral self-blame and perceived control. *Journal of Behavioral Medicine*, *22*, 407-418.

Doble, B., Lau, E., Malhotra, C., Ozdemir, S., Teo, I., & Finkelstein, E. A. (2020). The association of self-blame with treatment preferences in a multi-country cohort of advanced cancer patients from the approach study. *Journal of Psychosomatic Research*, *139*. dol:10.1016/j.jpsychores.2020.110284

Duncan, C. & Cacciatore, J. (2015). A systematic review of the peer-reviewed literature on self-blame, guilt, and shame. *Journal of Death and Dying*, *0*, 1-31.

Eways, K. R., Bennett, K. K., Hamilton, J. L., Harry, K. M., Marszlek, J., Marsh, M. O., & Wilson, E. J. (2020). Development and psychometric properties of self-blame attributions for cancer scale. *Oncology Nursing Forum*, *47*, 79-88.

Feiring, C., & Cleland, C. (2007). Childhood sexual abuse and abuse-specific attributions of blame over 6 years following discovery. *Child Abuse & Neglect*, *31*, 1169-1186.

Feiring, C., Taska, L., & Chen, K. (2002). Trying to understand why horrible things happen: attribution, shame, and symptom development following sexual abuse. *Child Maltreatment*, *7*, 25-39.

Feiring, C., Simon, V. A., Cleland, C. M. (2009). Childhood sexual abuse, stigmatization, internalizing symptoms, and

the development of sexual difficulties and dating aggression. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *77*, 127-137.

Frazier, P. A. (1990). Victim attributions and post-rape trauma. *Journal of Personality and Social Psychology*, *59*, 298-304.

Frazier, P. A. (2000). The role of attributions and perceived control in recovery from rape. *Journal of Personal and Interpersonal Loss*, *5*, 203-225.

Frazier, P. A. (2003). Perceived control and distress following sexual assault: a longitudinal test of a new model. *Journal of Personal and Interpersonal*, *6*, 1257-1269.

Georgiou, S. N. & Stavrinides, P. (2008). Bullies, victims and bully-victims: psychological profiles and attribution styles. *School Psychology International*, *29*, 574-589.

Glinder, J. G., & Compas, B. E. (1999). Self-blame attributions in women with newly diagnosed breast cancer: a prospective study of psychological adjustment. *Health Psychology*, *18*, 475-481.

Graham, S., Bellmore, A. D., & Mize, J. (2006). Peer victimization, aggression, and their co-occurrence in middle school: pathways to adjustment problems. *Journal of Abnormal Child Psychology*, *34*, 367-378.

Graham, S. & Juvonen, J. (1998). Self-blame and peer victimization in middle school: an attributional analysis. *Developmental Psychology*, *34*, 587-599.

Guy, A., Lee, K., & Wolke, D. (2017). Differences in the early stages of social information processing for adolescents involved in bullying. *Aggressive Behavior*, *43*, 578-587.

Hamrick, L. A., & Owens, G. P. (2018). Exploring the mediating role of self-blame and coping in the relationships between self-compassion and distress in females following the sexual assault. *Journal of Clinical Psychology*, dol: 10.1002/jclp.22730.

Harris, C., Ullman, S. E., Shepp, V., & O'Callaghan, E. (2021). Multiple perpetrator sexual assault: correlates of ptsd and depressive symptoms in a sample of adult women. *Journal of Sexual Aggression*, *27*, 387-400.

Harry, K. M., Bennett, K. K., Marszalek, J. M., Eways, K. R., Clark, J. MR, Smith, A. J., Waters, M., Bergland, D., Umhoefer, A., & Wilson, E. (2018). Scale development and psychometric properties of the cardiac self-blame attributions scale in patients with cardiovascular disease. *Health Psychology Open*, *5*.
dol: 10.1177/2055102918786865

Hassija, C. M., & Gray, M. J. (2013). Adaptive variants of controllability attributions among survivors of sexual assault. *International Journal of Cognitive Therapy*, *6*, 342-357.

速水 敏彦（1990）．教室場面における達成動機づけの原因帰属理論　風間書房

Hill, J. L., & Zautra, A. J. (1989). Self-blame attributions and unique vulnerability as predictors of post-rape demoralization. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *8*, 368-375.

Janoff-Bulman, R. (1979). Characterological versus behavioral self-blame: inquiries into depressions and rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, *37*, 1798-1809.

Janoff-Bulman, R. (1992). *Shattered assumption: Towards a new psychology of trauma*. New York: Free Press.

香取 早苗（1999）．過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究　カウンセリング研究，32，1-13.

Katz, J., May, P., Sorensen, S., & DelTosta, J. (2010). Sexual revictimization during women's first year of college: self-blame and sexual refusal assertiveness as possible mechanisms. *Journal of Interpersonal Violence*, *25*, 2113-2126.

Kline, N. K., Berke, D. S., Rhodes, C. A., Steenkamp, M. M, Litz, B. T. (2021). Self-blame and ptsd following sexual assault: a longitudinal analysis. *Journal of Interpersonal Violence*, *36*, 3153-3168.

Koss, M. P., & Figueredo, A. J. (2004a). Cognitive mediation of rape's mental health impact: constructive replication of a cross-sectional model in longitudinal data. *Psychology of Women Quarterly*, *28*, 273-283.

Koss, M. P., & Figueredo, A. J. (2004b). Change in cognitive mediators of rape's impact on psychosocial health across 2 years of recovery. J*ournal of Consulting and Clinical Psychology*, *72*, 1063-1072.

Koss, M. P., & Figueredo, A. J., Prince, R. J. (2002). Cognitive mediation of rape's mental, physical, and social health tests of four models in cross-sectional data. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *70*, 926-941.

McGee, R., Wolfe, D., & Olson, J. (2001). Multiple maltreatment, attribution of blame, and adjustment among adolescents. *Development and Psychopathology*, *13*, 827-846.

Malcarne, V. L., Compas, B. E., Epping-Jordan, J. E., & Howell, D. C. (1995). Cognitive factors in adjustment to cancer: attributions of self-blame and perceptions of control. *Journal Behavioral Medicine*, *18*, 401-417.

Manne, S., & Sandler, I. (1984). Coping and adjustment to genital herpes. *Journal Behavioral Medicine*, *7*, 391-410.

Meyer, C. B., & Taylor, S. E. (1986). Adjustment to rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, *50* 1226-1234.

Mokma, T. R., Eshelman, L. R., & Messman-Moore, T. L. (2016). *Journal of Child Sexual Abuse*, *25*, 428-448.

奈須 正裕（1988）．Weiner の達成動機づけに関する帰属理論についての研究　教育心理学研究，*37*，84-95.

小川 翔大（2011）．他者からの同情によって生じる感情――出来事の原因帰属と相手との親密さによる感情の違い――　教育心理学研究，*59*，267-277.

O'neill, M. L. & Kerig, P. (2000). Attribution of self-blame and perceived control as moderators of adjustment in battered women. *Journal of Interpersonal Violence*, *15*, 1036-1049.

大芦 治・平井 久 (1981). 学習性無力感に関する帰属理論についての研究　心理学評論, *35*, 175-200.

Peterson, C., Schwartz, S. M., & Seligman, M. E. P. (1981). Self-blame and depressive symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, *41*, 253-259.

Pham, N. T., Lee, J. J., Pham, N. H., Phan, T. Q., Tran, K., Dang, H. B., Teo, I., Malhotra, C., Finkelstein, E. A., & Ozdemir, S. (2021). The prevalence of perceived stigma and self-blame and their associations with depression, emotional well-being, and social well-being among advanced cancer patients: evidence from the approach cross-sectional study in Vietnam. *BMC Palliative Care*, *104*. dol: 10.1186/s12904-021-11803-5

Plaufcan, M. R., Wamboldt, F. S., & Holm, K. E. (2012). Behavioral and characterological self-blame in chronic obstructive pulmonary disease. *Journal of Psychosomatic Research*, *72*, 78-83.

Schacter, H. L., & Juvonen, J. (2015). The effects of school-level victimization on self-blame: evidence for contextualized social cognitions. *Developmental Psychology*, *51*, 841-847.

Schacter, H. L., & Juvonen, J. (2017). Depressive symptoms, friend distress, and self-blame: risk factors for adolescent peer victimization. *Journal of Applied Developmental Psychology*, *51*, 35-43.

Schacter, H. L., & Juvonen, J. (2019). Dynamic changes in peer victimization and adjustment across middle school: does friends' victimization alleviate distress? *Child Development*, *90*, 1738-1753.

Shelley, D., & Craig, W. M. (2010). Attributions and coping styles in reducing victimization. *Canadian Journal of School Psychology*, *25,* 84-100.

Sigurvinsdottir, R., Ullman, S. E., & Conetto, S. S. (2019). Self-blame psychological distress, and suicidality among African American female sexual assault survivors. *Traumatology*, *26*, 1-10.

Tennen, H., Affleck, G., & Gershman, K. (1986). Self-blame among parents of infants with perinatal complications: the role of self-prospective motives. *Journal of Personality and Social Psychology*, *50*, 690-696.

Timko, C. & Janoff-Bulman, R. (1985). Attributions, vulnerability, and psychological adjustment: the case of breast cancer. *Health Psychology*, *4*, 521-544.

Ullman, S. E. (2014). Correlates of posttraumatic growth in adult sexual assault victims. *Traumatology*, *20*, 219-224.

Ullman, S. E., Filipas, H. H., Townsend, S. M., & Starzynski, L. L. (2007). Psychosocial correlates of ptsd symptom severity in sexual assault survivors. *Journal of Traumatic Stress*, *20*, 821-831.

Ullman, S. E., Peter-Hagene, L. C., & Relyea, M. (2014). Coping, emotion regulation, and self-blame as mediators of sexual abuse and psychological symptoms in adult sexual assault. *Journal of Child Sexual Abuse*, *23*, 74-93.

Ullman, S. E., Townsend, S. M., Filipas, H. H., & Starzynski, L. L. (2007). Structural models of the relations of assault severity, social support, avoidance coping, self-blame, and ptsd among sexual assault survivors. *Psychology of Women Quarterly*, *31*, 23-37.

Weiner, B. (1979). A theory of motivation for some classroom experience. *Journal of Educational Psychology*, *71*, 3-25.

Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. (1971). Perceiving the causes of success and failure. In Jones, E. E., Kanouse, D. Kelley, H. H., Nisbett, R. E., Valins, S., & Weiner, B. Eds., *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey : General Learning Press.

Yang, J. Y., McDonald, K. L., & Seo, S. (2022). Attributions about peer victimization in US and Korean adolescents and associations with internalizing problems. *Journal of Youth and Adolescence*, *51*, 2018-2032.